経営存在論の枠組〔Ⅱ〕

——経営の環境論的考察——

谷　口　照　三

Ⅰ．緒言——経営学と経営存在論——
1．経営学における方法問題
2．経営の存在論的究明と経営存在論
3．経営存在論とその展開の起点
Ⅱ．環境論的考察の意味と意義
1．環境の概念について
2．環境の本質
3．環境論的考察の意味と意義
以上前々号
Ⅲ．環境・主体連関と環境分類の視座
1．環境・主体連関と主体の受動性・能動性
2．環境把握の知覚論的基礎
3．環境分類への視座
以上本号
以下次号
Ⅳ．環境分類と経営在存分析の枠組
1．環境の性質と要素的環境および対境構造
2．主体的存在性と意味論的環境分類
3．経営存在分析の枠組
Ⅴ．結言——環境論的考察と経営存在論——
1．経営学にとっての「経営の環境論的考察」
2．経営存在論と経営環境論の基礎
3．環境論的考察に基礎づけられた経営存在論の意義

Ⅲ．環境・主体連関と環境分類の視座

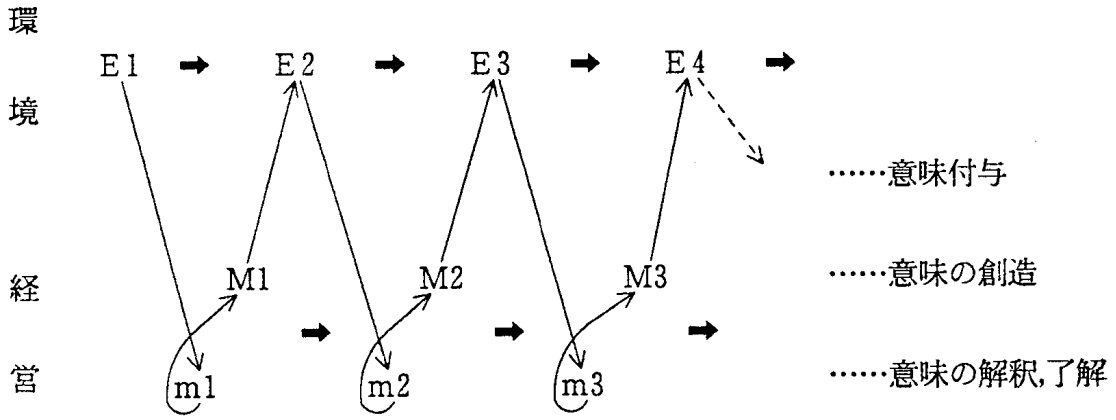
1．環境・主体連関と主体の受動性・能動性

前稿では，経営学の基礎論としての，特に経営の歴史的存在様能の解明と共に将来の存在様態の展望を可能とせしめる経営存在論の枠組を構築するために，その出発点として経営の環境論的考察の意味と意義を検討してきた[1)]。「経営存在論の枠組」という主題の副題として「経営の環境論的考察」を設定した意味は，ただ単に主題を限定することにではなく，むしろ後者の展開によってのみ前者の構築が可能であるという点にある。経営の環境論的考察は，経営の単なる外的考察や環境決定論的考察ではなく，なによりも経営を主体的存在として考察する仕方に他ならないのであり，経営の主体性分析へと連動していかねばならない。そのためには，経営を客体化と主体化の統一的プロセスと見，その主体化プロセスをコンテクストとして客体化プロセスを解釈することが肝要になってこよう。この点を方法的に確定するためには，さらに環境と主体である経営の連関が何を意味しているかを，検討する必要がある。「環境と経営の連関」については既に前々稿で言及しているが，ここでさらに敷衍的に展開してみよう。この考察を通じて，環境把握のための環境分類への視座を得ることが本稿の目的である。

拙稿「経営学の哲学的基礎」において，「環境と経営の連関」を第1図の様に表し，以下の様に説明した[2)]。「経営は，環境から発生する意味を解釈・了解し，かつ新たな意味を創造し，環境に意味を付与していく。環境は，経営からの意味付与によって，新たな環境となり，また経営に対して新たな意味付与が行なわれる。経営はその意味を解釈・了解することにより，新たな経営となる。環境と経営の連関は，かような創造的相互関係の循環過程である」。これは，筆者がA・N・ホワイトヘッドのアクチュアル・エンティ

1）谷口照三稿「経営存在論の枠組〔1〕――経営の環境論的考察――」『経済経営論集』（桃山学院大学）第35巻第1号，1993年5月。
2）谷口照三稿「経営学の哲学的基礎――A・Nホワイトヘッドの哲学を中心として――」『経済経営論集』（桃山学院大学）第34巻第4号，1992年11月。

第1図 環境と経営の連関



谷口照三稿「経営学の哲学的基礎」『経済経営論集』(桃山学院大学) 第34巻第4号, 1992年11月。65頁。

ティ論の主要な結論の一つを「主体的存在とは, 自己創造的被造物であり, 客体化プロセスと主体化プロセスの統一的プロセス的存在である」と見[3], それを「経営の主体的存在性」に適用したものである。

ここで言う「意味付与」は, 何等かのシグナル, 具体的なパワーあるいは行動等による環境から経営への, また経営から環境への「促し」[4] を意味している。ただし, それは環境から経営へ, あるいは経営から環境へただ単に「外的」に与えられるのではない。「促し」は, 「環境と主体の連関」の結果という性質をもつものと考えなければならない。なぜならば, 前々稿で指摘したように[5], 環境と主体は相互内在的であるからである。この理解を促進するには, E1→m1→M1→E2を大プロセスとした場合, E1→m1(→M1) のプロセスに, E1→m1→M1→E2という小プロセスが存在すると考えるとよい。経営にとって, 環境からの意味付与は, 自らの直接的過去を含めた, いわゆる過去の意味の創造と環境のそれへの反応の複合的な結果が「促し」という作動的要因として機能する。それは環境の持つ能動性

3) 詳しくは上掲稿を参照されたい。
4) 村田晴夫稿「組織倫理と管理論——階層的多元主義の試み——」『武蔵大学論集』第40巻第1号, 1992年11月。
5) 谷口照三稿「経営学の哲学的基礎——A・N・ホワイトヘッドの哲学を中心として——」を参照されたい。

に他ならない。この様な「促し」が，その方向性，指示性の解釈，了解を通した経営の新しい意味の創造に先立ってあるということが，「環境と経営の連関」を理解することにとって重要である。

しかしながら，通常，環境から経営への「促し」よりも，経営の新しい意味の創造や環境への「働きかけ」ということが強調される。つまり，環境の能動性よりも，経営の能動性に力点がおかれている。今日，環境問題が提起されている一方で，経営ないし企業の「環境創造」という言葉がポジティブな意味で，流行的に使用なされることからも，このような傾向が強まっていることが見て取れる。環境問題への対応において，偏向的に「科学・技術の発展」に期待することや，それに基づく「環境ビジネス」がムード的に流行することは，これを例証するであろう[6]。他方，環境問題の提起は，通常，われわれに主体の環境への働きかけないし環境創造が環境問題の原因としてあるという点の自覚を促すと思われるし，またかかる「促し」にわれわれが順応しなければならないという考えを植えつけるものと考えられている。前者の「環境創造」の立場も後者の「環境への順応」の立場も，いずれも広い意味での環境論（environmentalism）の特徴を表している。それらを純粋に主張するならば，前者は「技術中心主義」(technocentrism) 的な「成長願望主義者」(cornucopians) の，また後者は「生態系中心主義」(ecocentrism) 的な「純粋環境主義者」(deep environmentalists) の立場となろう[7]。

環境と主体の関係は，「成長願望主義者の立場」では「働きかける」のは主体であり，環境は働きかけられる対象であるが，「純粋環境主義者の立場」ではそれらは全く逆になる。そこでは，それぞれの立場において環境や主体

6) もちろん，それらは必要なことであるが，後に述べる主体の持つ受動性の把握をそれらによって希薄化させてはならない。

7) *Cf*. T. O' Riordan, *Environmentalism*, 2nd ed., Pion Press, 1981. P. E. O' Sullivan, "Environmental Science and Environmental Philosophy—Part 1 Environmental Science and Environmentalism", J. Rose, ed, *Environmental Concepts, Policies and Strategies*, Gordon and Bieach Science Publishers, 1991, p. 68.

の属性として「能動性」・「受動性」が捉えられている。それは，それぞれの立場から「環境と主体の関係」がそれぞれ構成されていることを意味する。しかしながら，「環境と主体の関係」は構成されるものではなく，現実的な出来事であり，プロセスとして存在している。したがって，現実に即した「環境と主体の関係」の把握は，「能動性」・「受動性」をある立場の「考え方」を特徴づけるものとするのではなく，まずなによりもそれらを現実的なプロセスに含まれる特徴として理解するものでなければならぬ。かかる理解を得るには，「受動性」と「能動性」にまつわる「誤解」を解く必要があろう。

環境と主体との関係において，その主体の行動を順応的適応と「主体的」ないし積極的的適応という意味合いで区分する時，前者に対して「受動性」，後者に対して「能動性」という言葉が使われる[8]。その区分自体は別に間違いではないが，それらが全く別のものと考えられると，つまり受動性と能動性を決定論と自由論の二元論として捉えるならば，あるいは第1図の例えばM1→E2の局面の反応的特性に限定するならば問題である。これが解くべき「誤解」である。むしろ，それらを第1図の例えばm1→M1→E2のプロセスの結果であるのみではなく，それに先行するプロセスにおいても捉える必要があろう。つまり，E1→m1において受動性を，m1→M1において能動性を捉えなければならない。受動性と能動性という問題は，ホワイトヘッドが言う「客体化から主体化への分析」の範疇で解釈しなければならない。この点から言えば，受動性と能動性は連動する。この点について，メルロー

8) 社会学などでは，adjustment を順応とし，adaptation を適応とし，それらの総称を fittness（適合）とし，行動主体の環境形成行為を捉えようとしている。環境と主体の関係の選択が因果的偶然や無意識による場合を adjustment，それが意識的な場合を adaptation としており，前者には受動性，後者には能動性の意味が含まれている。岡田真著『ヒュマン・エコロジー』春秋社，1972年。139～140頁。参照。なお，後にホワイトヘッドの知覚論を述べるところで「順応」という言葉を使用しているが，それは conformation の訳であり，それは環境と主体の構造的ないし組成的関係に基づいている適合と捉えるべきであろう。したがって，それはただ単に無意識的であったり，因果的偶然による適合である順応と区別されるべきである。

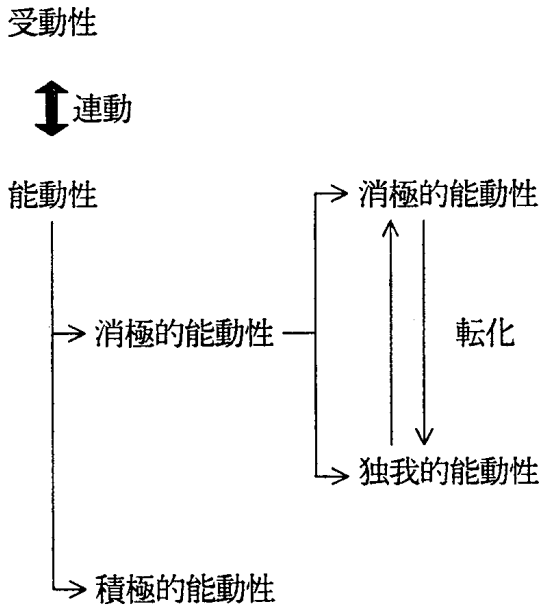
＝ポンティは次のように大変刺激的な表現で語っている[9]。「われわれは全く能動的であると共に全く受動的なのであって，それは，われわれが時間の出現そのものだからである」。「われわれ」をより広く「主体」と捉えるならば，この言葉は，ここで検討してきたわれわれの見解を要約したものとなろう。

結局，受動性と能動性については，二つの次元で捉えることが必要であろう。つまり，第１図を用いれば，Ｅ１→ｍ１→Ｍ１のプロセスにおける受動性と能動性の連動という次元と，Ｍ１→Ｅ２のプロセスの結果である反応的特性としての受動性と能動性という次元である。前者は知覚レベル，後者は行為レベルに区別出来るであろう[10]。本質的には，受動性と能動性という言葉を前者の次元に限定したほうが良いであろう。そうした場合，後者の次元では能動性に一元化し，それをその強度において消極的能動性と積極的能動性に分類することが必要である。それらは，主体の意味の解釈・了解（ｍ１）とそれに基づく意味の創造（Ｍ１）に依存する。しかし，いずれの反応的特性も能動性，すなわち客体的プロセス（Ｅ１→ｍ１）が先行しているものと考えなければならない。つまり，消極的能動性と積極的能動性は，主体の受動性と能動性の連動の質に依存する。受動性と能動性の連動が弱ければ能動性も弱いものとなろう。実際には，主体が受動性を全く拒否ないし無視し，能動性を発揮する場合もあろう。そうした場合，受動性と能動性の連動は性質的には極小と見ることができるので，消極的能動性のなかの「独我的能動

9) M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de* la *perception*, Gallimard, 1945. M・メルロー＝ポンティ著，竹内芳郎，木田元，宮本忠雄訳『知覚の現象学２』みすず書房，1974年。333頁。

10) 知覚も行為であるが，ここで言う行為レベルの「行為」は知覚に基づいて展開される行為のことである。受動性と能動性の連動は，第１図のＥ１→ｍ１→Ｍ１→Ｅ２の全プロセスにおいて捉えることの方がより正確であろう。その場合，「知覚レベル」と言うより「存在レベル」と言い換えた方が良いのかも知れない。また，この環境と経営の連関という大きなプロセスのなかに同型の小さなプロセスがあると考えるならば，「受動性と能動性の連動」と言うより，メルロー＝ポンティーが言うように「受動的であると共に能動的」と表現した方がより正確かもしれない。前者の表現は，抽象化されている。だが，理解の促進にとっては，このような表現は，今述べたことを前提とするかぎり，一応の意味を持つものと思われる。

第2図　受動性と能動性



性」と捉えるべきであろう。消極的能動性と独我的能動性は，共に他に転化する可能性があると考えなければならない（第2図参照）。この点については後述する。

通常，特に積極的能動性と独我的能動性の混合が見られる。それは，環境と主体の連関プロセスにおいてではなく，単に主体（主観と言った方が正しい）の立場から，換言すれば第1図で言えばM1→E2に限定した，つまり受動性と能動性の連動を無視した仕方で能動性を見ているからである。メルロー＝ポンティ流に言えば，それは，主体が環境を操作し，環境に住まうことを諦めるからに他ならない[11]。「住まう」(habiter) という言葉は（もともとハイデッカーが使ったのであるが），彼が好んで使う言葉の一つである[12]。それは，主体に関して言えば，「全く能動的であると共に全く受動的

11) M. Merleau--Ponty, *L' œil et l' esprit*, Les Temps Modernes M・メルロー＝ポンティ著，滝浦静雄，木田元訳『眼と精神』みすず書房，1966年，1頁。参照。彼は，「科学は諸物を操作し，諸物に住まうことをあきらめている」と述べている。

12) この意味をO・フリードリッヒ・ボルノウは以下のように述べている。「彼の場合，住まう（habiter）ということばは，彼の世界関係が全体的に反映している，↗

なので」あるという点や，「受動性と能動性の連動」という点を意味しているものと見てよい。能動性や「環境と主体の連関」を正しく理解するには，主体は「住まう」ことを学ばなければならないであろう[13]。

2．環境把握の知覚論的基礎

前稿で指摘したように，環境は，どこまでも「～にとっての環境」である。それは，基本的に主体の認識に依存するからである。度々「環境の危機」が叫ばれてきたが，それは同時に「環境把握の危機」でもある[14]。このことは，第一に主体の「環境把握」が「環境の危機」の原因であるという点を，第二にそのことがさらに主体の「生存の危機」をもたらしたという点を意味しているように思われる。前稿で説明した環境概念を用いれば，②認知環境ないし知覚環境と③作用環境ないし行動環境の乖離，齟齬，また①主体を取り巻く外界（環境基盤ないし潜在的環境）と④（②と③の統一としての）環境的世界との矛盾，対立として，環境問題を説明することが出来よう。環境問題が「環境把握の危機」であるということは，われわれが「住まう」ことを学ばなくなりつつあるということである。正確には，学ぶ方法を間違ったと言った方がより適切であろう。環境問題は，われわれに，上述した乖離，齟齬，矛盾，対立の解消を迫り，そのため「住まう」ことの学び方に反省を促していると言ってよい。それへの応答は，われわれあるいは主体が環境に対する

↘まさにかぎになることばとしてあらわれている。しかも彼はこのことばを，人間の自分の家屋への関係を示すためにもちいているだけでなく，同時に，ここで獲得された理解を，人間の世界全体への関係を示すために利用している」。Otto Friedrich Bollnow, *Mensch und Raum*, W. Kohlhanmmer Stuttgart, 1963. O・フリードリッヒ・ボルノウ著，大塚恵一，池川健司，中村浩平訳『人間と空間』せりか書房，1988年。122頁。参照。

13) O・フリードリッヒ・ボルノウによれば，ハイデッカーはこのことを「健てること，住まうこと，考えること」という論文で言っていると言う。上掲書，261頁。参照。また，彼は，本書で「住まうこと」の意味を詳しく展開している。121～124頁。257～292頁。参照。

14) ジム・ノルマンも「環境の危機は知覚の危機にほかならない」と言っている。Jim Nollman, *Spirtual Ecology: A Guide for Reconnecting with Nature*, *Bantan Books*, 1990. ジム・ノルマン著，星川　淳訳『地球は人間のものではない』昌文社，1992年。154頁。

受動性を高め，質の高い能動性，つまり積極的能動性を発揮することでなければなるまい。まずなによりも，われわれは環境に対する感受性を養い，環境との一体化を感得する必要があろう[15]。それが，「生存の危機」をもたらした「環境把握の危機」を克服する唯一の根本的道である。

「環境の危機」の原因としての「環境把握」は，すでに明らかなように環境に対する感受性が低く，環境との一体化を感得しえない，質の低い受動性と能動性の連動をもたらし，消極的能動性や独我的能動性を形成していくであろう。今日まで，概ねこのような方向を辿ってきたことは否定できない。何故に，そのようになってきたのであろうか。根本的に考えるならば，「環境把握」が近代科学を基礎づける知覚の在り方に依存してきたためであろう。とするならば，環境問題への取り組みは，第一に，かかる「知覚の在り方」を克服することから始められねばならぬ。この意味で，環境問題は，その次の段階，つまり主体が積極的能動性を発揮することの必要性を予想させるが，まずなによりも新しい知覚論の構築を要請していると言わなければならない。近代科学的な知覚論は，ホワイトヘッドや他の人が言っているように，眼を，すなわち視覚を強調したところに，その特徴がある[16]。視覚はいわゆる知覚の中心をなすが，近代科学的知覚論の問題性は，他の感覚，つまり嗅覚，味覚，聴覚，触覚を信頼性が低いとして避け，視覚を過度に強調することにある。他の感覚は「身体を使っている」という「感じ」が残る。だが，視覚が強調されるならば，ホワイトヘッドが指摘しているように，「見られたもの」のみが強調され，「身体を使っている」という「感じ」が後退する[17]。イーフー・トゥアンは，「近代の知覚的な経験は，視覚的な刺激や経験がほかを圧倒するとともに，互いに分離され明瞭になる傾向がある」と指摘し，次の

15) この意味にかぎるならば，deep environmentalists の言うことは正しい。
16) 基本的に，ホワイトヘッド以外に，現象学や最近の認知科学では，また deep environmentalists はこの点を問題にしている。
17) *Cf*. A. N. Whitehead, *Process and Reality: An Essay in Cosmology*, 1929, Free Press Paperback, 1969. pp. 98～99. A・N・ホワイトヘッド著，平林康之訳『過程と実在――コスモロジーへの試論――1』みすず書房，1983年。120～121頁。参照。

ように語っている[18]。「この変化の結果，知覚世界は拡大しているが，いっぽうでその原初的な豊かさは失われているのだ。もうひとつの結果は，自己についての感覚が環境から切り離され，強化されていることである。見ることの強調，とりわけ心の目で見ることの強調は，個人を孤立させる効果と，認識の唯一の枠組みとしての自己に関する意識を促進する効果がある」。視覚は能動的であるが，他の感覚は比較的受動的である。したがって，見ることが強調される知覚においては，受動性と能動性の連動が切断されがちになる。むしろ，この点にこそ近代科学的知覚論の問題性があると言うべきであろう。

環境問題への実践的な対応には，視覚のみならず他の感覚による知覚経験をも培っていく必要があろう。その必要性は，視覚以外の感覚を重んじると言うのみならず，むしろそのことを通して環境との一体化を感得していくことに，なければならない。経営においては，人間の五感に当たるものがどのような構造を持っているかを明らかにし，かつそれらが互いに機能的に補完されるような形で知覚経験をいかに豊かにしていくかが重要な課題になろう。しかし，この点は後日の検討課題としてここでは扱わない。ここでは，「身体を使って知覚している」という点を考慮した，また行為レベルでの能動性の質（消極的，独我的，積極的）を区別する上で基礎となりうる新しい知覚論の概要に触れておきたい。

ホワイトヘッドは，山本誠作が「知覚の三重構造」と呼んだ「因果的効果」(causal efficacy)，「現示的直接性」(presentational immediacy)，「象徴的関連づけ」(symbolic reference) によって，新しい知覚論を提示している[19]。

---

18) Yi-Fu Tuan, *Segmented Worlds and Self: Group Life and Individual Consciousness*, University of Minnesota Press, 1982. Y・トゥアン著，阿部一訳『個人空間の誕生』せりか書房，1993年。162頁。

19) 山本誠作著『ホワイトヘッドと西田哲学』行路社，1985年。43～87頁。参照。*Cf*. A. N. Whitehead, *Symbolism, Its Meaning and Effect*, 1927. ホワイトヘッド著作集第8巻，藤川吉美，市井三郎訳『理性の機能・象徴作用』松籟社，1981年。85～165頁。参照。*Cf*. A. N. Witehead, *Process and Reality*, pp. 76～99,↗

「因果的効果」は，知覚する場合に「身体を使っている」というわれわれが持つ感じであり，環境からの「促し」をそのものとして受け取ることである。ホワイトヘッドはこれを「身体的経験」(physical experience) として，以下の様に説明している[20]。「身体的経験の原初的形態は，情動的 emotional である——それは，どこか他の機会に感じたように受けとられ，また主観的な情念 passion として順応的に自分のものにされる盲目的情動なのである。経験の高次段階に特有の言葉で言えば，原初的要素は，共感 sympathy である。すなわち，他者における感じを感じ，他者とともに順応的に感じることである」。「因果的効果」による知覚は，知覚者の環境から提供される「情動的エネルギーの鼓動の伝達と考えうる」[21]。それは，「直接の過去から派生した感覚および直接の未来へと移行する感覚を生みだ」し，「また過去の自分に属しながら現在の自分に移行して現在の自分から未来の自分へと移行していく情動的感受の感覚を生み出す」[22]。それは，漠としており，処理しがたいものである。だが，それらは，「力の源泉であり，内的生命をもち，またそれぞれの内容の豊富さをもち，その本性の中に世界の運命が隠されているところのそれらの存在諸事物こそ，われわれの知りたいものなのである」[23]。

「現示的直接性」とは，眼前に広がる感覚対象 (sensa) の幾何学的な諸関係の直接的な知覚を示している。これは，一般的な意味での意識とか知覚が基本的に前提しているものと言ってよい。いわゆる感覚知覚 (sense-perseption) である。これによって得られる知識は，ホワイトヘッドによれば[24]，「生き生きとしていて精密であり，また不毛である」。「不毛である」

↘pp. 130～151, pp. 182～194, pp.195～212. 訳書，90～122頁，164～192頁，233～248，248～271頁。参照。

20) *Ibid.*, p. 188. 訳書，214頁。

21) *Ibid.*, p. 138. 訳書，174頁。

22) *Ibid.*, p. 207. 訳書，264頁。

23) ホワイトヘッド著作集第8巻，藤川吉美，市井三郎訳『理性の機能・象徴作用』，140頁。

24) 上掲書，110頁。参照。

と言うのは，「まったくそれ自身のみを考えてみれば」という限定が必要であろう。その意味は，情報とか知識としてみれば曖昧かつ情動的トーンを帯びているが，「現示的直接性」に先行し，それを限定する「因果的効果」という身体的経験から切り離して捉えるならば，前者は「単なる現われ」[25] にすぎない，ということである。「現示的直接性」は，知覚するものとそれが知覚される環境に対して持つ空間的関係によって左右されており，「因果的効果」によって「場所化」(localization) されている[26]。したがって，それらが無関係に捉えられるならば，高度の抽象化となる。ホワイトヘッドは，「現示的直接性」は「因果的効果」を基礎としている，ということを以下の様に表現している[27]。「同時的世界が知覚されるのは，それ自身に固有の働きによってではなく，過去から，つまり同時的世界を限定し，そしてまた，同時的な知覚者をも限定する過去から，導き出されたもろもろの働きによってである。これらの活動性は，原初的には，人間身体の過去のうちにあり，もっと離れては，身体が機能している過去の環境のうちにある」。

われわれの知識は，「因果的効果」による知覚のみでは漠となり，また「現示的直接性」による知覚のみでは極度に抽象化され，現実世界より遊離することになる。それらは結合されなければならない。「象徴的関連づけ」とは，「これらの二つの様態を一つの知覚に融合する綜合的活動」[28] であり，「因果的効果」と「現示的直接性」との交互作用 (interplay) である。ホワイトヘッドは，この点について次のように言っている[29]。「人間の心は，

---

25) 上掲書，111頁。市井三郎は訳注で以下の様に言っている。「『現われ』の原語は apperance であり，これは哲学上は『仮象』などと訳されるのが通例であるが，ホワイトヘッドはこの語を『本体』と『仮象』といった対立的な意味では用いないので，このように訳しておく」。191頁。

26) *Cf.* Whitehead, *Process and Reality*, p. 208. 訳書，265頁。参照。

27) Whitehead, *Adventures of Ideas*, 1933,Free Press Paperback, 1967. p. 219. ホワイトヘッド著作集第12巻，山本誠作，菱木政晴訳『観念の冒険』松籟社，1982年。301頁。

28) ホワイトヘッド著作集第８巻，藤川吉美，市井三郎訳『理性の機能・象徴作用』，106頁。

29) 上掲書，97頁。

その経験のある組成が，他の組成に関する意識や信念，感情，とり扱い方などを引き出す場合には，象徴的に機能しているのである。この場合，前者の一組の組成は『象徴(シンボル)』であり，後者の一連のものがその象徴の『意味』を構成する。そして象徴から意味への移りゆきをおこなう有機的機能が，『象徴的関連づけ』と呼ばれるのである」。ここで，経験を構成する「組成」と言っているのは，「因果的効果」と「現示的直接性」によるそれぞれの知覚対象であるが，いずれが「象徴」となり「意味」となるかは固定的ではない。ただ，比較的原初的でないものが「象徴」となり，比較的原初的なものが「意味」となるのが，一般的である。なぜならば，前者の方が「便利で明確で処理しやすい」[30] からである。したがって，一般的には，「現示的直接性」を「象徴」として，「因果的効果」のなかに「意味」を見い出す様に「象徴的関連づけ」がなされることになろう。メルロー＝ポンティが「意味は見えないものであるが」と断わり，「しかしそれは見えるものの戦列のうちにあり，それは見えるものの虚焦点であり，それは見えるもののうちに(透し模様で)描きこまれているのである」[31] と言う時，ホワイトヘッドの言う「象徴的関連づけ」と同様のことを語っていると見てよかろう。

われわれは，基本的には，この様にして物事を知り，また環境を把握しているのである。しかし，それは正しいこともあれば，誤りであることもある。「因果的効果」や「現示的直接性」にはそれ自体としては，正しいとも間違っているとも言えない。それらは，それらとして確かに経験したことであろう。しかも，「象徴的関連づけ」は誤謬の可能性から開放されることはない。それは，知性の高さとか低さ，あるいは思慮の深さとか浅さによるというより，より根源的には「象徴的関連づけ」によるものと言った方がよい。それは，「解釈に基づいている」し，「因果的効果」による知覚の不確かさや曖昧性のために，象徴が指し示すところの「意味が転じやすく，未決定である」

30) 上掲書，139～140頁。
31) M. Merleau--Ponty, *Le Visible et L' invisible*, Gallimard, 1964. M・メルロー＝ポンティー著，滝浦静雄，木田　元訳『見えるものと見えないもの』みすず書房，1989年。311頁。

からである[32]。したがって，「象徴的関連づけ」は正当化を必要とする。正当化し得ないならば，その「象徴的関連づけ」は誤っているのである。

3．環境分類への視座

すでに明らかなように，「因果的効果」，「現示的直接性」，「象徴的関連づけ」は，それぞれ前々稿，前稿で説明した主体的存在の客体化プロセス，主体化プロセス，そしてそれらの統一的プロセスに対応している[33]。ホワイトヘッドは，この統一的プロセスを抱握（prehension）という概念で説明しているが，「象徴的関連づけ」はこれにあたる。抱握は，物的抱握（physical prehension）と概念的抱握（conceptual prehension）からなり，さらにそれらの中に積極的抱握（positive prehension；感受 feeling）と否定的抱握（negative prehension；感受から除去すること）がある[34]。物的抱握とは他の主体や環境の抱握であり，概念的抱握はそれらの特徴，性質の抱握である。「因果的効果」は物的抱握に，「現示的直接性」は概念的抱握に対応する。そして，「象徴的関連づけ」は，物的抱握を概念的抱握に関連づけ，何を抱握し何をそれらから排除するかの主体的形成（subjective form; この場合，自己超越的主体 subject-superject の形成と言ったほうが適切である）[35] を計ることに関連している。

この主体的形成によって，「因果的効果」や「現示的直接性」による情報，知識を単に知的に比較しただけでは得られない情動（emotion），価値づけ（valuation），目的（purpose），敵意（adversion），反感（aversion），自覚（consciousness）などがもたらされる[36]。ただし，それらは「原始的で

32) *Cf.* Whitehead, *Process and Reality*, p. 196, p. 212. 訳書，205頁，271頁。参照。
33) 谷口照三稿「経営学の哲学的基礎——A・N・ホワイトヘッドの哲学を中心として——」を参照されたい。
34) *Cf.* Whitehead, *Process and Reality*, p. 28. 訳書，33～34頁。参照。詳しくは，谷口照三稿「アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの有機的哲学に関するノート」（『南山論集』第7号，1977年，3月）を参照されたい。
35) *Cf.* Whitehead, *Process and Reality*, p. 34. 訳書，42頁。参照。
36) *Cf. Ibid.*, p. 28. 訳書，34頁。参照。ホワイトヘッド著作集第8巻，藤川吉美，↗

素朴な象徴的移行を拡大し，また純化していくことができる」[37] ようにするために，正当化を必要とする。その「正当化は，将来に対するプラグマティックな訴えの中に，求められなければならない」[38]。ここで言う「プラグマティックな訴え」とは，情動，価値づけ，目的，敵意，反感，自覚などが当の主体にどのような意味を持ち，どのように役立つかを明らかにすることである[39]。ここで，「将来に対する」ということに注意を向けなければならない。「プラグマティックな訴え」は，「いま，ここで」のそれではない。それは「次後の経験に基づく知的批判」[40] であり，それが将来の「象徴的関連づけ」，主体的形成の質を決定づける。「プラグマティックな訴え」による正当化は，客体化と主体化の統一的創造的循環プロセスの下に位置づける必要があり，またかかるプロセスを機能させるものとならなければならない。それは，このようなプロセスが主体にとって本来的であることを前提とするならば，「次後の経験に基づく知的批判」を意味するのみならず，同時に「因果的効果」による知覚の充実の重要性を意味していると言わなければならない。ホワイトヘッドが「過去の研究」[41] の効用（と同時にその弊害を指摘しているのであるが）を語る意味は，ここにあると思われる。このことは，以下のホワイトヘッドの言葉から推論することが出来よう[42]。「われわれの現在の経験がどうしてそうなるかということはわれわれにおける過去がどのようなものであるか，ということにかならず順応しているのである」。「われわれの経験は過去から派生する。その経験は，情緒と目的で同時的世界の提示を豊かならしめ，また世界の豊富さを永久にますかあるいは減ずるところの能動性な要素，という装いの下に，その性格を未来に遺贈するのであ

↘市井三郎訳『理性の機能・象徴作用』，117頁。参照。

37）上掲書，118頁。

38）上掲書，118～119頁。

39）上掲書，191頁。第二章訳注（1）参照。

40）上掲書，118頁。

41）Whitehead, "The Study of the Past It's Uses and It's Dangers," *Harvard Business Review, Vol.* 11, No. 4, 1933, pp. 436～444.

42）ホワイトヘッド著作集第8巻，藤川吉美，市井三郎訳『理性の機能・象徴作用』，141頁。

る」。

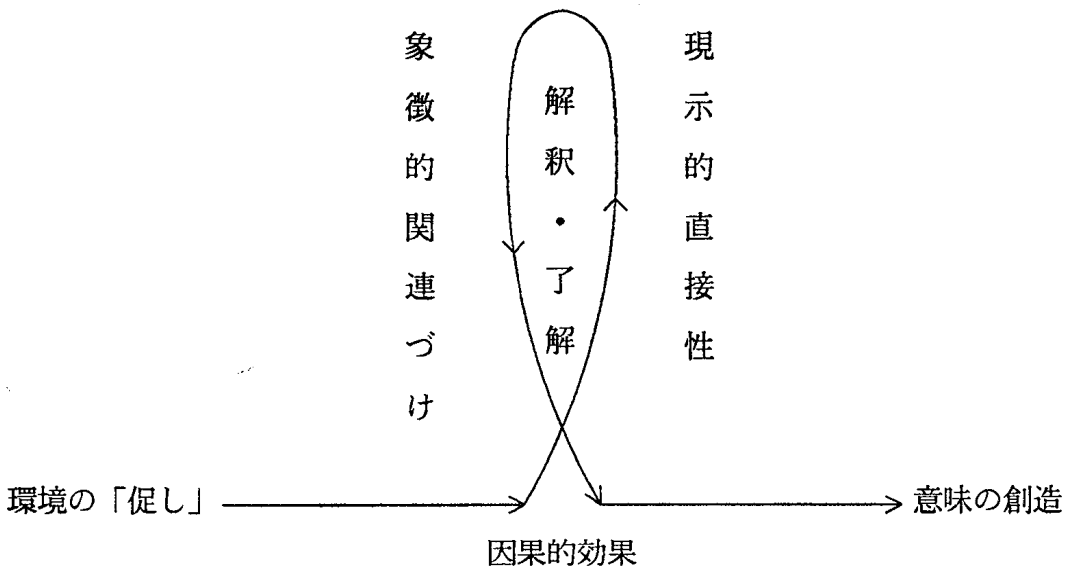
以上の論述は，すでに，知覚のレベルを越えて行為のレベルの分析に入りかけている。主体は，特に人間や経営はその存在特性のために，自らの「因果的効果」，「現示的直接性」，「象徴的関連づけ」による知覚を分析対象としなければならない。ホワイトヘッドの言葉によれば，「概念的分析」が介入してくる。「象徴的関連づけそのものは，概念的分析によって大いに助長されはするが，第一義的にはその分析の帰結ではない。なぜなら象徴的関連づけは，その種の精神的分析が退潮している場合にも，なお経験を支配しているからである」[43]。「象徴的関連づけ」と「概念的分析」の区分は大切である。前者は現実的世界に，後者は抽象の世界に属しているからである。「概念的分析」は「抽象化」ではあるが，主体の現実世界での生き方に取って必要な抽象化である。したがって，ホワイトヘッドは，「象徴的関連づけは，概念的分析に先行して説明されねばならない」と言い，さらに「この両者のあいだには，強い相互作用があるのであってその相互作用は互いに他を助長するもので」ある，と言う[44]。先に引用した「原始的で素朴な象徴的移行を拡大し，また純化していくこと」が「概念的分析」の役割である。その役割遂行によって初めて，「象徴的関連づけ」の信頼度を高め，誤謬の可能性からは開放されることはないが，その頻度を減少させていくことができるのである。「象徴的移行」ないし「象徴的関連づけ」の拡大と純化は，「因果的効果」と「現示的直接性」によるそれぞれの知覚内容をバランスをもって充実させることによって，確実にもたらされるものと思われる。このアンバランスが「象徴的関連づけ」の誤謬の根本原因ではなかろうか。少なくとも，それが誤謬の可能性を拡大する上で大きな作用をなしている，と見なければならない[45]。

43）上掲書，106頁。

44）上掲書，107頁。

45）科学技術の発展と科学的思考の社会への浸透が「現示的直接性」による知覚を高度に発展させ，そのことによって逆に「因果的効果」による知覚の希薄化に導いたことが，今日の地球環境問題をもたらした一つの大きな原因であることは間違いない。また，イソップ物語の犬は，刺激的な「現示的直接性」により「因果的↗

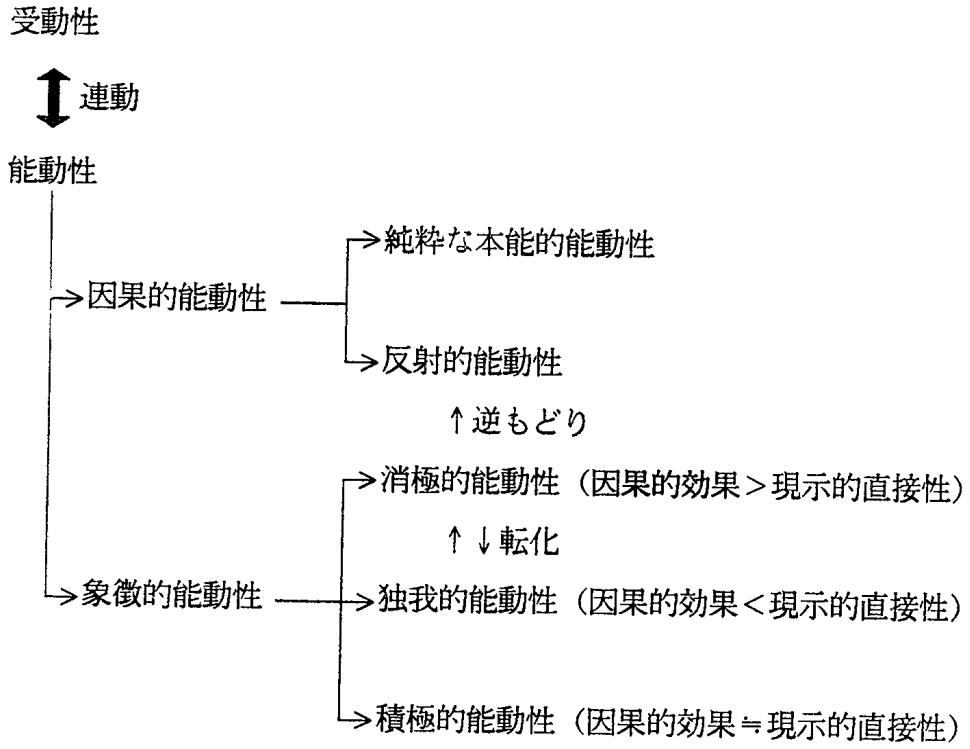
第3図



さて，このように考えてくると，第一図の「環境と経営の連関」と第2図の「受動性と能動性」の能動性の分類は，現実的世界における「因果的効果」と「現示的直接性」との「象徴的関連づけ」の下に，また抽象の世界における「概念的分析」の下に，今一度捉え直しておかなければならない。環境からの「促し」（E 1→）は「因果的効果」であり，経営の解釈・了解(m 1）は「因果的効果」と「現示的直接性」との「象徴的関連づけ」によってもたらされると捉えなければなるまい（第3図)。そして，「概念分析」は，それらの3つの知覚内容を対象とし，何を環境として捉えたか（「因果的効果」の分析)，かかる環境の個々の特徴を如何に捉えたか（「現示的直接性」の分析)，それぞれの環境を如何なる特徴の下に捉えたか，さらに何故そのように捉えたか（「象徴的関連づけ」の分析）を解明する枠組を用意し，現実世界における経営の環境把握を促進することになろう。また，かかる枠組は，経営の「象徴的関連づけ」による「意味の創造」から「(環境への）意味付与」(M 1→E 2）という行為のパターンをも説明しうるものでなければならな

↘効果」の希薄化を招き，肉片を失うことになったのである。すなわち，人間も犬も誤る論理的構造は同一である。

第4図



い。そこで，第2図で示した行為のパターンを「象徴的関連づけ」が欠けている場合（「現示的直接性」が欠けているか一時的に欠ける場合）とそれが機能している場合を挿入し，第4図の様に改めて示したい。ホワイトヘッドは，純粋に本能的な行動，反射行動，象徴的に条件づけられた行動を区別している[46]。純粋に本能的な行動とは，「現示的直接性」によることなく「因果的効果」に反応する行動である。反射行動とは，「象徴的関連づけ」を経験し，あるいは経験してしまった主体の本能への逆もどりである。象徴的に条件づけられた行動とは，「象徴的関連づけ」によって条件づけられた行動である。第4図では，純粋に本能的な行動と反射行動を因果的能動性（causal activity）とし，象徴的に条件付けられた行動を象徴的能動性（activity by symbolic reference）とした。そして，そこに，消極的能動性，独我的能動性，積極的能動性を位置づけ直した。それらの違いは，「因果的効果」と「現示

46）ホワイトヘッド著作集第8巻，藤川吉美，市井三郎訳『理性の機能・象徴作用』，157～159頁。参照。

的直接性」のそれぞれの知覚内容の充実のバランス度の相違として捉えることが出来るように思われる。

以上が，ホワイトヘッドの知覚論を検討して得られた経営環境分類のための視座である。また，それらはかかる環境分類が環境の性質と共に主体の客体化と主体化の統一プロセスの視点に基づかなければならないことを示している。このことは，前稿で取り上げ，また本稿でも若干触れた環境分類（①主体を取り巻く外界，②認知環境ないし知覚環境，③作用環境ないし行動環境，④②と③の統一としての環境的世界，⑤①から④の全体としての環境）の，特に④の環境的世界のより詳細な分類，および①の外界と④の環境的世界との関連分析が必要なことを示唆している。これらを展開することにより，経営存在分析，特にその歴史的存在様態の分析のための視座と枠組を得ることが，次号の課題となる。（未完）

（たにぐち・てるそう／経営学部教授／1993. 10. 4受理）